宗像

開門の太鼓の音と共に本殿へ進む参拝者

平成二十一年正月三が日
63万人で賑わう

神武天皇即位紀元二六六九年、平成二十一年「己丑」の新年を迎えた。

本殿の大太鼓が新年の時を告げ、神門が開かれた。初詣の人の波は瞬く間に拝殿前に広がり賽銭、拍手の音が響き渡り、人々の新しい年に祈る熱気が境内に満ち溢れた。

大晦日は冬型の気圧配置となり、非常に寒さの厳しい日となる。午後三時より年越の大祓式が斎行され、寒風の中約三〇〇名の参列者が神門前参道両脇に二重となり式に参列さ

遷宮で 結ぶ人の輪 心の輪
第六十二回神宮式年遷宮

2月祭事暦

毎月1・15日 月次祭
午前10時～
高宮祭
第二宮・第三宮祭
宗像護国神社祭（1日）
午前11時～
総社祭
浦安舞奉奏（1日）
豊栄舞奉奏（15日）

1日 節分豆打ち式
午前11時～ 午後 2 時～ 於＝本殿特設ステージ

3日 節分祭
午前11時～
於＝本殿
豆打ち式 午前11時30分～

11日 建国祭
午前11時～

余滴

二月十一日は「建国をしのび、国を愛する心を養う日」として、国民の祝日に定められた「建国記念日」である。戦前は「紀元節」と呼ばれており、初代神武天皇が日本を平定し、橿原宮にて御即位された日（辛酉年春正月辰朔）を、現在の暦に合わせて算出し、明治六年に制定された。本年は神武天皇即位紀元二六六九年となる▼戦後、紀元節は廃止されたが、国家の建国を祝う日の復活を望む国民の声を受け、昭和四十一年の祝日法改正により法制化され、建国記念の日と改められて、国民の祝日に加えられた▼近年の「祝日法改正」いわゆるハッピーマンデー制度により、祝日の一部を従来の日付から特定の月曜日に移動した。一月十五日（成人の日）が第二月曜日に、七月二十日（海の日）が第三月曜に、九月十五日（敬老の日）が第三月曜日に、十月十日（体育の日）が第二月曜日に変更されている▼歴史や伝統に由来する祝祭日を、休日の利便性の為に変更してしまうことで、祝日の意義を失ってしまうのではないか。例えば十月十日（体育の日）は東京オリンピック開催日だということは、意外と知られていない。つまり何故その日が祝日なのかという意義を失いつつあるように思われる。祝日が持つ本来の意義を知る事が、日本の歴史、文化、伝統を守る事につながると思うが。（坂）

神具・装束・授与品
井筒
装束店 〒600-8503 京都市下京区油小路通六条上る フリーダイヤル 0120-075-980
福岡店 〒812-0068 福岡市東区社領1-12-10-401 フリーダイヤル 0120-055-092
授与品店 〒601-8348 京都市南区吉祥院観音堂町23 フリーダイヤル 0120-075-820

木組の家 匠の技
総合建築業 株式会社 弘江組
〒811-3406福岡県宗像市稲元4丁目1-20 電話(0940)32-2567

31日（開門前）の本殿授与所

多くの参拝者で賑わう境内

大晦日、午後11時30分―巨開門

れた。引続き除夜祭が本殿で斎行され平成二十年最後を締めくくる祭典が斎行された。

午後十時頃、第一駐車場は新年を迎える車ですでに満車状態となり、周辺道路は渋滞となった。参道は第一鳥居付近より神門前にいたるまで行列が出来、途中の心地池には露店の灯りと、太鼓橋を渡る人々が古札として納める熊手・鏑矢を手に本殿に進む影が映し出され、神門前では開門を待つ多くの人々の姿が篝火で浮かび上がっていた。

各社頭、本殿授与所・祈願殿授与所・縁起物授与所・福みくじ授与所にはそれぞれ神職、巫女、見習巫女が迎春体制を完備し待機。神酒授与所は地元総代・協力会員にご奉仕いただき、駐車場では、警備員三十名が車の誘導・駐車場の整理にあたった。午前零時の神門開扉を宗像市消防団・ふくろう部隊に担当、ご奉仕いただき、開扉後は宗像警察署のご協力と共に、参拝者を安全に拝殿に誘導して頂いた。

元日、午前九時より国家・皇室の御安泰、国民の幸福を祈る元旦祭を、翌二日、三日と新年二日祭、新年三日祭と宗像護国神社新年祭を各々斎行。平成二十一年の幕開けを寿ぐ祭典は滞りなく執り行われた。

正月三が日は、寒気は強かったものの、二・三日と晴天に恵まれ初詣の人々で御社頭は大いに賑わった。元旦の宗像地域は雪が時々舞う程度であったが、早朝のニュースによれば九州自動車道が積雪により一部通行止め、北九州の都市高速も通行止めと報道された。この日気温は五℃前後で推移し非常に寒く、特に午前中は参拝者に影響を及ぼした模様である。

祈願祭は、元旦、午前零時より恒例の九州旅客鉄道株式会社の新年一番祈願祭が本殿で斎行された。儀式殿では家内安全、厄年祓い等の祈願が、祈願殿では新年交通安全大祈願祭が斎行

若者も多く訪れた神酒所

屋根に看板を設置した古札納所

大量に掛けられた絵馬堂

元日の本殿授与所前

される。祭典終了後直会として本殿横に設けられた神酒授与所で、ノンアルコールの甘酒が振舞われた。

仕事始めの五日は、背広、会社の制服姿での団体で境内は賑わい、企業・団体の新年業務繁栄・安全、交通安全祈願祭が続いた。神札授与所では、神札、お守りを事業所・所有車輌数とまとめて受けられる姿が特徴的であった。

今年より「車両用」「錦袋入守」のデザインを一新、又昨年十月より授与している、御神木で奉製された「杜守」も加わり参拝者の目を引いていたようであった。更に「神札・お守り」案内の展示ケースを授与所軒下に掲げ、わかりやすく、受けやすいと好評であった。「福みくじ」の授与所では、『今年最初の運だめし』と籤を求める人で「福みくじ」の授与所は大変な賑わいであった。

勅使館を暫しの憩いの場にと、「茶房」として開放し、抹茶・ぜんざい・コーヒーを提供すると、喧騒から離れ心和む時間を過ごされた。

近年では辺津宮本殿でのお参りだけでなく、沖津宮を祀る「第二宮」、中津宮を祀る「第三宮」へ参拝の後、宗像大神御降臨の地である高宮祭場へと参拝され、最後に茶房でひと時を過ごされる傾向が見られ、時間をかけてゆっくりと参拝される方が年々増加しているようである。

十日から十二日の連休には、新成人の晴れ着姿の参拝が多く見受けられ、十日にはヤマザキ製パン(株)福岡工場の成人祭が当社にて行われた。又観光バスも多く、遠方からの三社詣での人々で賑わった。十一日は麻生福岡県知事が「宗像・沖ノ島と関連遺産群」の世界遺産、国内候補地リスト記載に伴う視察にて当社辺津宮・中津宮を視察された。

今年、正月三が日の宗像大社の初詣参拝者は六十三万人を数えた。

元旦の神門前

多くの方が引かれた「福みくじ」

授与所上部の掲示は好評でした

古式祭・鎮火祭斎行

◆古式祭◆

師走十四日（日）、八五〇年の伝統を持つ「古式祭」が斎行された。

この神事は神前で行われる祭典と、清明殿で行われる「御座」の二つで構成され、神饌（御供え物）は神職だけではなく地元宗像市田島・江口区民、地元総代等が一丸となって調製し、御座は田島区内八班の氏子が毎年交代で奉仕する（今年は飛松班）という宗像地方独自の神事である。

古式祭「御座」の様子

祭典はまだ夜が明けない暗闇の午前六時、前日から参籠（神社に泊まり世俗との関わりを断つこと）した神島宮司以下神職が奉仕し、宗像市田島・江口両区長、御座の当番班の班長、地元総代が参列し斎行された。

御神前には、ミカンの原種である「九年母」、同市の浜にこの時期しか打ち上がらない「ゲバサモ」と呼ばれる海藻など、この祭典だけに調製された特殊神饌が供えられた。

一方、清明殿入口には午前五時頃より、「御座」受付開始を待ちわびる参拝者の列が出来た。御座の一番座は、祭典後の午前六時三〇分から一座五十名で始まり、本年は五番座まで約二二六名が参列された。膳には特殊神饌として神前に供えられたものや、田楽・ガメ煮・甘酒・なま酢などが並び、参列者は平素口にすることのできない御膳に舌鼓を打ちながら、神人和楽の一時を過ごした。

◆鎮火祭◆

同日午前十時からは鎮火祭が斎行され、古式ゆかしく火打石で忌火を起こし、瓠で水を汲み火に注ぎ忌火を鎮め、その上に赤土をかけ川菜で覆う「鎮火の儀」が行われた。

迦具土神の荒びを鎮め、その災いを受けることの無いようにと、火災の絶無と消防関係者の安全を祈り、谷井宗像市長、池浦福津市長をはじめ、両市内の消防関係者、國友宗像警察署長らが参列し敬虔な祈りを捧げた。

谷井宗像市長（左）池浦福津市長（右）

鎮火の儀

御本殿・第二宮・第三宮 大注連縄を懸け替え

十二月二十日（土）新年を迎えるにあたり辺津宮御本殿・第二宮・第三宮の大注連縄の懸け替え作業が、大島の沖・中両宮奉賛会、同翼賛会、田島区総代・協力会による奉仕のもと行われた。

注連縄奉製作業は、十月初旬に神田で刈り取った稲を懸稲で乾燥脱穀した後、十一月初旬「藁すぐり」を田島区地元総代・協力会総出で行い、一握ほどの束を約一、五〇〇本作り大島へ送った。大島では十一月下旬、沖・中両宮奉賛会、同翼賛会の奉仕により大注連縄を綯った。二本の注連縄を縒り合わせる作業はかなり難しく、長年の経験と試行錯誤により三十余年受け継がれている。

完成した大注連縄は、大島から再び辺津宮へと海を渡って運ばれ、沖・中両宮奉賛会、同翼賛会、田島区総代・協力会、当大社職員を含む総員二十八名により懸け替えられ、新年に向けての最初の作業となった。

近年、農機具の機械化により「藁」の入手が難しくなっていたが、平成八年に当大社御神田が復活し、神饌米の収穫を得て年間のお供えと、不足ぎみだった藁の確保が出来る様になった。

また、当大社の大注連縄は藁がばらばらになることのないようにと、大島の漁師の発案で、ブリなどの大物を釣り上げる時に使う透明のテグス（釣糸）が等間隔で美しく巻かれている。ご参拝の折には、農家と漁師が真心込めて奉製された大注連縄を是非ご覧下さい。

御奉仕された大島と田島区の氏子の皆様

年越しの大祓神事・除夜祭

大晦日の午後三時より神門前で年越しの大祓神事が、続いて本殿で除夜祭が斎行され、この冬一番の寒波に見舞われ寒さ厳しい中であったが、近年にない多くの参拝者が参列された。

大祓式は七月三十一日とこの十二月三十一日の年二回行われているが、七月を災難消除、農作物の豊作を祈る「夏越の大祓式」、十二月を一年間の罪・穢を祓い、新しい年を清々しい気持ちで迎えていただく「年越しの大祓式」と称している。

定刻、新年を迎える準備が整った境内に参拝者が続々と詰め掛け、高向権宮司が大祓詞を奏上、続いて参列者各人「切麻(きりぬさ)」で祓い、「祓物(はらえつもの)」に息を吹きかけて切り裂き、罪・穢を祓い清めていた。

引き続き、本殿で除夜祭が執り行われ、当大社職員、参列者一同は今年一年の宗像大神のご加護に感謝し、皇室・国家の繁栄、世界恒久平和、氏子崇敬者の皆様方が清々しく新年を迎えられることを祈念し、平成二十年の諸祭儀は全て滞り無く終了、神門は閉じられた。

筑前大島 中津宮のお正月

年の瀬に寒波が到来し、海上はやや時化気味となり大変な冷え込みの中、新年を中津宮で迎えようと寒風吹きさす中、神門前には開門を待つ参拝者の列が並んだ。

午前零時、境内に太鼓の音が響き、奉賛会員の奉仕により定刻に開門。島内氏子をはじめ、正月を故郷で過ごそうと帰島した人々が先を競い神前に進み、敬虔な祈りが捧げられた。

大島出身の新成人

神前には大島内外の漁業・農家より海の幸・野の幸が供えられ、社頭では正月の縁起物の破魔矢・福俵・熊手また一刀彫などが授与されるとともに、毎年恒例の「中津宮新春福みくじ」が沖・中両宮翼賛会会員の奉仕により授与された。

この「福みくじ」では宗像市の(株)城山家具(社長=寺田修)及び宗像農業協同組合大島支所より特別協賛を賜り授与所前は長蛇の列となり、新年の福を授かろうと多くの参拝者が詰掛けていた。

また境内では沖・中両宮奉賛会のご奉仕と巻網船団の宮地丸組、春日丸組、沖栄水産のブリ、及び地元の古賀 理氏からの野菜提供により「開運大鰤鍋」が本年も開催され多くの参拝者に振舞われた。

午前七時元旦祭が斎行され、沖中両宮奉賛会・翼賛会会員を始め島民が参列する中、本年の国家・皇室の安泰と島民・国民の幸福が神前に祈念された。

翌二日も天気は良いものの、気温は低く寒い一日となった。

午前十一時には、成人祭が斎行され本年は十三名の新成人が参列し神前に奉告をした。

またこの日は三十三才、四十一才、四十四才各々の厄除・晴厄祈願祭も斎行され、境内ではあちらこちらで、久しぶりの同年との再会に歓喜の声があがっていた。

三日には、高向権宮司他奉仕により元始祭並びに宗像漁協大島支所の大漁祈願祭が斎行され、沖中両宮奉賛会並びに漁業従事者参列の元神前に本年の海上・操業安全・大漁満足が祈られた。

祭典終了後、社務所にて直会が行われ、権宮司挨拶に続いて宗像漁業協同組合 山口國一組合長も新年のご挨拶をいただき、一同本年の豊漁を願いながら盛り上がりを見せた。

かくして平成二十一年の筑前大島の正月は沢山の島民のご協力により無事終える事ができた。

この正月祭斎行にあたり、各方面より多大なるご協力・ご協賛をいただきました崇敬者の皆様に、紙面をかりまして厚く御礼申し上げます。

麻生福岡県知事 辺津宮・中津宮を視察

正月参拝の続く一月十一日（日）、麻生渡福岡県知事が、年末世界遺産暫定リスト入りした「宗像三宮と関連遺産群」の主要地域である、当大社・辺津宮と中津宮を参拝された。

午後二時、谷井宗像市長とともに到着された知事は、高向権宮司の案内で本殿へ進まれ、神島宮司から総社である辺津宮の境内並びに由緒説明を受けられた。

神宝館は以前に拝観されたこともあり、その後すぐに神湊港へ移動、大島へ渡られ中津宮を参拝、霊泉「天の真奈井」の名水も口に含まれていた。

島の裏側にある沖津宮遥拝所へも足を延ばされたが、生憎その日は大時化で沖ノ島を仰ぐことは叶わなかったようである。

本土に戻った後は、宗像三宮の祭祀を司った宗像一族の墳墓とされる、津屋崎の新原奴山古墳群、宮地嶽古墳を視察され、一連の視察を終えられた。

今後は、宗像・福津市に加え、福岡県も「宗像・沖ノ島と関連遺産群」の世界遺産登録に向けて、本格的に始動するとのこと。神社として協力できるところは出来うる限り協力し、信仰に関わる部分は慎重に対応していきたいと思う。

神島宮司の説明を受ける麻生知事（辺津宮）

中津宮を参拝

沖津宮遥拝所も参拝されました

献米奉告祭斎行

時折、小雪の舞う寒空の一月十三日、宗像大社氏子会総代多数の方々の御参列を頂き献米奉告祭が斎行された。

この神事は、氏子の皆様から寄せられた新穀を御神前に献上し、昨年秋の収穫を感謝すると共に、今年の五穀豊穣、無病息災を祈る神事である。

祭典では和田博人氏（宗像市上八）が、氏子会を代表し奉幣使として御奉仕された。前日から当大社に斎泊精進潔斎の上、斎服を着装して祭典に臨まれ、無事に氏子奉幣詞を宗像大神の御前で奏上、大役を見事に果された。

祭典終了後には、氏子会役員を永年お勤めいただいた方（十年以上）の表彰式が行われ、本年は氏子会監事である城野寅夫氏（福津市福間）に感謝状と記念品が贈呈され、参列した氏子会同志等から温かい祝福を受けた。

その後、清明殿を会場に「鏡開き」が行われ、直会として皆で雑煮・ぜんざいを頂き、新しい一年を清々しく過ごすことができると当大社を後にした。

尚、ご奉納いただいた献米は、日々の日供祭をはじめ諸祭典の神饌としてお供えし、皆様方の安全と繁栄を御祈念致しております事を御報告致し、衷心より御礼申し上げます。

平成二十一年
献米奉告祭氏子奉幣使
和田　博人（宗像市上八）
宗像大社氏子会永年勤続者表彰
氏子会監事　城野　寅夫
（福津市福間）

氏子奉幣使として御奉仕された和田博人氏（右）

(続) 浜の寄物

232

いしい ただし

昨年(二〇〇八)も沖縄県・宮古島を巡ってきた。「狩俣の神・人・自然」の講演とシンポジウムにも参加した。

早めに装丁家の毛利一枝氏と福岡を出て、那覇へ、そこから乗りかえ宮古島へ。宮古島では元近畿大学教授の高橋皓子氏と合流、平良市内と海岸を歩き、夜は富山房の坂本帰杏社長や谷川健一氏と合流した。

シンポジウム、谷川健一氏の基調講演 2008.11.22

翌日は地元の浜川綾子さんの案内で島内の御嶽を巡った。

この日、富山房から復刻されたき慶世村恒任(きよむらこうにん)が昭和二年に刊行した「宮古史伝」をいただき、それを持って島内を歩いた。沖縄・宮古島の歴史と民俗をまとめたもので、当時発行部数も少なく、その後再版もされず「幻の名著」とされていた。宮古島を知るのには、欠かせないものである。

慶世村は巻頭で宮古島を「帝都を距(へだた)る一千里南五百浬(かいり)の洋上、太平洋の波、東支那海の水と相うつところに点在せる八個の島嶼、それが宮古群島(みあく)である。古くは麻古山(まこやま)とも云われ、近代は太平山(たいへいざん)の号を以て称えられた。面積合わせて僅かに一五方里、民約六万、大陸の沿岸なら寧(むし)ろ忘れられてもよい程の小地であるが、洋上に位置するだけに海に浮んで移動した民族の足がかりとなり、かなりの史料を蔵して今日に及んだ」と述べている。著者の慶世村恒任は、明治二十四(一八九一)年四月、宮古島平良村で生れる。明治三十九年沖縄県師範学校に入学、その頃から多くの文学書を読んでいる。病気の為、学校を中退した。明治四十五年兵役のため熊本連隊に入隊、大正三年除隊をした。大正四年頃に宮古朝日新聞を創刊している。大正五年から三年間熊本に滞在したあと帰省。大正十年平良村の代用教員となりその間、郷土史研究に関心を与せる。大正十五年二度目のニコライ・ネフスキー来島で調査にも協力している。本来病弱で昭和四(一九二九)年三十九歳の若さで病死した。昭和五十五年、宮古の熱帯植物園内の一角に「宮古研究の父 慶世村恒任」の碑が建てられた。

大神島を拝す

宮古史伝には各御嶽についても記述されている。それをたどるように大浜綾子さんから御嶽を巡り、解説をきき、参拝もした。

会場になった狩俣は集落の背後は原生林(ここの植物群落は天然記念物の指定を受けている)となって、海岸にそって細長く続いている。森はフンムイと呼ばれ、神聖な森であり、信仰の対象となっている。狩俣には四ヶ所の御嶽がある。森の下の浜は長い浜(ナービタ)がつづく。砂浜に面したところの御嶽はイスウツ御嶽(磯津)で、鳥居や灯籠、拝殿もある。祭神は竜宮神、船守りの神を祀っている。そこを拝して下の浜に出てみると、正面に大神島が美しい姿を見せている。島にむかって参拝。浜は漂着物が多く見られたので少し歩くと椰子やゴバンノアシがごろごろしていた。四十五センチほどの二匹のウミガメは、アカウミガメとタイマイだった。タイマイの甲がはがれて散乱していたので拾ってきた。

イスウツ御嶽

第五七〇回 宗像大社歌会詠草

大野展男選 毎月25日〆切

北九州市 八幡西区 吉田ウト子

幾年の深夜勤手当に求めたる百科辞典かなし貰ひ手もなき

〔評〕インターネットの検索で図書館並みのことが判る時代。それを承知での作者の嘆き。二句は「深夜手当」、「かなし」は「いま」としてリズムを調えたらと思う。

宗像市 東旭ヶ丘 矢野 玲子

ひたひたと渚に寄する波の音子守唄きく程の優しさ

〔評〕穏やかな波の寄せ返しは母なる海の呼吸である。初句と結句の「優しさ」が付き過ぎているのが残念。秋の日の、冬の日のなどを考えたい。

宗像市 土穴 山本 静子

防壘とう博多銘菓に含みある壘とおぼしきアーモンド食む

〔評〕アーモンドを壘ととらえたのは一つの発見であり、そこがいい。三句以下は「含まるるアーモンド食む壘とおぼしも」の表現もある。

福津市 若木台 野間 精一

蒼天の満月見よと指差して横山さんが頭上を仰ぐ

〔評〕蒼天はあおぞらの事、即ち昼間の空である。忙しい中でも常に空を仰ぐ横山さんに対するある種の尊敬の気持がある一首。

北九州市 戸畑区 田中ハツセ

短歌の道導きくれし伊規須さん四十年経て歌集を読みぬ

〔評〕前の作品がロマン性のうたに対し、こちらはリアルなうた。短歌を教えてくれた人の歌集にはじめて出合った驚きと喜びである。結句に歌集とあるので初句は「歌の道」として定型を守りたい。

宗像市 田野 森 甲子

牛年の年賀はがきを書きてをりお世話になりし人ら思ひて

〔評〕人柄の偲ばれる一首。結句は「ひとり一人に」の方が気持がこもるのでは、また牛年は丑年が正しい。

宗像市 田久 巻 桔梗

後継者さがしをけふも思ひつつ短歌大会のポスターを描く

〔評〕宗像大社短歌大会への情熱ゆえの一首、まだまだ巻さんを中心につづけて行って欲しいと思うのは私だけではない。

宗像市 田久 井上 光

わが家のトップニュースに迷い無し初ひ孫生まれすくすく育つ

〔評〕正月にふさわしい一首、新しい命は一家を幸せにする。下句は「初の曾孫はすくすく育つ」と。定型に納めたい。

宗像市 日の里 大和美由紀

しあわせを運んで来たる声と聞く庭や畑に笹鳴きこぼる

〔評〕これも新春にふさわしい一首。「庭や畑に」は事実そのままだろうが、「庭の木立に」と場所を一つにした方が歌は、すっきりとする。

福津市 中央 池浦千鶴子

バスの旅に皇帝ダリヤの大き花驚きながら造船所に着く

〔評〕旅の途中に見た、皇帝ダリアは軒を越す大きさだったのだろう。素直なうた。

福岡市 南区 加野シノブ

年せまる此の凍て空に若き人職うばわれし国はいかにや

〔評〕気持は詠われた通りであるがこのままでは新聞などの記事とさ程変わらない。そこが惜しい。

福岡市 南区 伊田有久衣

鈍色の曇り空のもと裸木の柿すずなりに凋落の秋

〔評〕いい情景を詠っているが「凋落の秋」は既成語、「すずなりの柿それぞれひかる」など作者の目で見た状態を詠うことが大切。

宗像市 光岡 白土 凌一

師走来て家族そう出で大掃除後の風呂で気持良し

〔評〕一家総出での掃除とは、ほほえましい風景である。下二句は字足らずなので「終はりしあとの風呂気持良し」とする。

選者詠

老人の一団見学なし終へて点呼してをり資料館前

河沿ひに冬日浴びをり昼は老い夜は若者のもとしベンチがうっすらと錆の吹きいづ正月の鰤切ると研ぎ終へたる出刃に

第五四五回 俳句作品集

福津市 勝浦 高山 睦子

蒟蒻の無人売店冬桜

宗像市 平井 占部 詩子

神名備の盛り塩かはく鵙日和

宗像市 東郷 田中 憲象

表札に墨入れている冬日和

宗像市 光岡 白土 凌一

初日の出拝んでうれ喜し吾心

宗像市 神湊 永島 紀子

鮫の口矢尻の如く乾き切り

宗像市 日の里 花田いつ枝

蹌踉(そうろう)の足立て直す冬椿

宗像市 田久 巻 桔梗

孫呼んでなほ余りたるおでん鍋

編集後記

年末に愚息がもう一人誕生しました。約一ヵ月早く生まれましたが、五体満足で生まれてくれ安心して新年を迎えることができました▼その正月を振り返ると、「ようやく、美しい花がいくつか咲いてくれた」そんな正月でした。景気の後退が著しい昨今ですが、参拝された皆様から予想以上の反響をいただき、さらに新たな可能性というものを見出すことができました▼もっと効率的、効果的になど、継続していく上での問題点も多々浮き彫りとなりましたので、さらに議論を重ね御神徳の宣揚に務めていく決意を新たにしました▼抽象的な表現ですが、次はもっと大きな美しい花、或いは大きな巨木となる木をと考えを膨らませると、やがてそれが伝統となっていくように思えてきました。（塚）

発行所 宗像大社社務所 宗像会

〒811-3505 福岡県宗像市田島
電話 0940-62-1311（代）
発行人 葦津幹之
編集人 大塚宗延
制作 ゼネラルアサヒ
印刷 ゼネラルアサヒ

毎月1日発行 定価1年送料共1,000円